

検査入院

赤谷慶子

吾は検査入院なるもの生まれ初めて體驗せり。二〇一六年に急性膽嚢炎となり、虎ノ門病院へ緊急入院し、翌日には腹腔鏡手術にて膽嚢は摘出せられき。残れる膽管の壁厚しといふ所見人間ドック検査結果に指摘せられしが二年ほど以前なりき。しかれども一年に一度の超音波検査にては醫師より捨て置かれたりき。然るに昨年霜月に新しき若き青年醫師、「こは腫瘍にあらずや、この後MRIを撮らむ」と放射線科に廻されき。一週間後の診察に醫師より、膽管腫れおり、良性か悪性かは分からずと告げられたり。次回は一泊二日の胃カメラ超音波検査すべけれど、こは消化器外科ならず消化器内科にて検査す。今一番胃カメラ操作に長ける醫師に繋ぐ、と言はれき。検査中おほかた昏睡の有様なりしにも關はず、醫師どもの「こは清げなり」などといふ話漏れ聞えたり。リンパ節腫れし事も判明せり。その腫れ具合の清げなる圓を描きたれば、おほかた良性ならむといふ判断なりき。しかれども、PET検査翌週入りき。睦月の診察に腫瘍良性か否かは不明といふ所見なり。

次は睦月後半にEUSといふ検査すと傳へられたり。胃カメラより針いだし、胃突き抜け腫れたるリンパ節に針刺し、その細胞採取し戻すといふ検査なり。リスク説明せられ、恐ろしき検査かなといふ心得のほかになれど、あくまでも検査せしこそ己も安心と考へ承諾せり。睦月後半に二泊三日の検査入院せり。高き技要する検査にて、數名の醫師關する事もあり是が非にも豫定日に決行する要ありとの由にて、普通の個室満杯の爲一つ等級の上の室に入れられき。最上階なるこの「病棟」は俗塵を離れたる別世界の高級旅館の如し。あたひを聞きて仰天すれど、ホテルオークラの新館の庭と米國大使館のグルーハウスを見下ろせり。コンシエルジュのをんな「新聞を奉らむとす。いづれの新聞好ましや」と聞かれ、常の病室とは隔絶せりと思ひき。とてもかくても検査は成功裏に終はり、三日間全く安靜に務め、事態順調に推移し、あらかじめ定めたるに従ひて土曜日に退院の運びとなりき。留守番せる犬猫は、近所の友人や散歩屋のおかげにて安定して過すを得たること、彼らの協力に感謝せり。

今後は経過觀察にて、定期的な血液と超音波、加へMRI等の検査を要し、異常判明せば次はERCP検査行ふ事と傳へらる。こは胃カメラよりなお小さきカメラ膽管に向け通し、膽管の腫れ箇所を採取するものごとし。すでにまな板の鯉の有様にて、あくまでも検査をしていただくとの事にて、原因究明あらせらるべく懇願せり。

(令和五年二月二十八日受附)